

となりの地域はどうしてる？

ノウハウ共有のための 防災ウォッチング



お問い合わせ 市民部 市民安全課 (近江庁舎)
☎52-6630 ☎52-6930

「かまどベンチ」は、レンガ囲いの土台の上に木製の座板を乗せたもので、普段はベンチとして使用しながら、非常時には炊き出し用の「かまど」として防災にも活用できる設備です。

今回、親子の絆プロジェクトの一環として、春照の田中良典さんが、息子の雄大くん・孝樹くん・秀治くんと親子で力を合わせて、かまどベンチづくりにチャレンジされました。

チャレンジにあたって、田中さんは、「東日本大震災で再認識しましたが、いつ起こるかわからない災害が

田中良典さんち(春照)の親子チャレンジ 「かまどベンチづくり」に密着

今回のチャレンジの様子は、「伊吹山テレビ9月16日号」で放送します。あわせてご覧ください。

発生した際には、親子や地域の絆が生きる力や支えあう力の源になると感じました。

かまどベンチの製作に親子で挑戦することで、一人では大変な作業も協力し合うことや支え合うことで乗り越え、災害時にも負けない心など、新しい絆を育みたいのです」と語ってくださいました。

実は、田中さんは県立彦根工業高等学校の都市工学科で、地域防災力向上のためのモノづくり活動として、「手作り“のかまどベンチを提唱されている先生。

この活動を地域で取り組んだ場合、「物理的効果」と「心理的効果」の両面から、地域防災力の向上が期待できると田中さんは話されます。

「被災時の設備や防災訓練の場として、かまどベンチが『物』として役立つっていくことはもちろんですが、その製作活動に様々な主体が関わることで、防災・減災の担い手である『者』も育っていきます。

例えば、設置場所を検討する際に地域の非常時をイメージすることで、おのずと防災意識が培われたり、その議論を通して、人と人のつながりも強くなったりします。

また、高齢者と子どもが交流しながら製作することで、防災知識や知

恵の継承、世代間の気づきなど、学びの効果や豊かな心を培う効果もあると思います」と、田中さん。



家族の絆が深まるスペースに…との願いを込めて、田中さんちのベンチは「きずなベンチ」の愛称に。

手作りのかまどベンチの製作は、子どもから高齢者まで幅広い世代が参加でき、計画から製作、そして炊き出しといった活動の経過と交流の積み重ねが自然と防災意識と連帯感を高めます。

左記のホームページで、彦根工業高等学校の取り組み事例が紹介されていますので、地域の防災活動のヒントにぜひお役立てください。

参考ホームページ

防災教育 チャレンジプラン

<http://www.bosai-study.net/2010houkoku/plan.php?no=8>

<http://www.bosai-study.net/2009houkoku/plan.php?no=1>

かまどベンチの製作方法や活用の手引きがダウンロードできます。



3 基礎コンクリートの練り混ぜ

最初に砂と砂利を混ぜたところにセメントを加えて混ぜる。さらに水を加えて練り上げる。

混ぜる容器がない場合は、ベニヤ板でも代用できるよ。



2 基礎の型枠の設置

寸法や垂直を確認しながら、掘削したところに型枠を設置する。設置後、内側に仕上りの高さの目安にする線を引く。(線の高さまでコンクリートを流すことになる)



1 基礎部分の土砂を掘削

基礎の大きさを確認して、それよりも少し広めにショベルやツルハシなどで土を掘削する。

掘る範囲をビニールテープで囲っておくとわかりやすいね。



6 モルタルの注入

砂・セメント・水を混ぜ合わせたモルタルをレンガの穴に流し込む。

今回は「穴あきレンガ」を使った簡易な方法です。普通のレンガをモルタルで接着していく方法などもあります。設置場所や参加者の状況などに応じて検討してください。



5 レンガ積み

型枠を外した基礎の上に、配置を確認しながらレンガを積んでいく。



4 基礎コンクリートの打ち込み

型枠の中に砂利をしき、そこにコンクリートを詰めていく。仕上がり面まで流しこんだら、表面をコテでならす。シート等をかけて、最低3日以上かけて固める。



8 完成！炊き出し訓練

単に作るだけに終わらず、完成後の広がりも大切。かまどを活かした訓練で知恵を継承する機会に。



7 座板づくり

木の厚みは、薄すぎると強度不足となり、厚すぎると取り外し作業が困難になるので注意。また、長持ちさせるために、防腐塗料や防腐剤などを塗っておく。

この座板はいざというときに、担架として利用できるよ。

